

銭形平次捕物控

十万両の行方

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、飯田町の上総屋かずさやが死んだそうですね」

ガラツ八の八五郎は、またニュースを一つ嗅ぎ出して来ました。江戸の町々がすっかり青葉つばに綴られて、時鳥ほととぎすと初鰹はつがつおが江戸っ子の詩情と味覚をそそる頃のことです。

「上総屋が死んだところで俺の知ったことじゃないよ」

銭形平次は丹精甲斐もない朝顔の苗なえを鉢に上げて、八五郎の話には身が入りそうもありません。

「ところが、聞き捨てにならないことがあるんですよ、親分」

「上総屋の死に様が怪しいとでも言うのか」

「二年も前から癩ようを患っていたっていうから、人手にかかって死んだとすれば、町内の外科が下手人みたいなもので——」

「落し話を聴いちやいない、——何が聞き捨てにならないんだ」

平次はようやく朝顔から注意そを外しました。

「金ですよ、親分。上総屋音次郎が、鬼と言われながら、一代にどれほどの金を拵こしらえたと思えますか？」

ガラツ八はなかなかの話術家です。平次が滅多な事件に手を染めないのを知って、こう乗出さずにはいられないように持ちかけるのでした。

「五六万両かな、——有るようでないのは何とかだと言うから、せいぜい三万両ぐらいのところかな」

「そう思うでしょう。ね、親分」

「イヤにニヤニヤするじゃないか、それとも十万両もあつたというのかい。こちらから見れば十万両は夢のような大金だが、上総屋なら」

平次はガラツ八に焦じらされると知って、忌いまいま々しくも煙草入を抜いて一服つけました。

「もつともこちらに十万両もあつた日にや、あつしはさつそく十手捕縄と縁を切つて——」

ガラツ八の話は、また妙なところへ飛躍して行きます。

「金貸にでもなつて懐ろ手で暮すつもりだろうが、そうは問屋が卸おろさないよ」

「そんなサモしい根性じゃありませんよ。まず山の手の百姓地を五六万坪買って——」

「大きく出やがったな、人にんじんごぼう参牛蒡でも作る気になったか」

「大違い、——親分に植木屋を始めて貰つて、あつしはそれを江戸の縁えんにち日へ持出して売
る」

「馬鹿だなア」

平次は仕様ことなしに苦笑をしました。そんな氣でいる八五郎の心根が哀れでもあつたのです。

「ね、親分。冗談は冗談として、上総屋の話だが、——誰でも一応は万と纏まとまった金があるに違いないと思うでしょう」

「それがどうした」

「死んでしまった後で、番頭や親類の者が、熊鷹くまたかまなこ眼で搜したが、不思議なことにあるものは借金ばかり。何万とあるはずの金が、たった十両もないと聴いたら驚くでしょう」

「驚くよ、——お前の義理でも驚かなくちや悪かろう、それからどうした」

「たったそれだけだが、ちよいと変じやありませんか親分。神田から番町へかけて、並ぶ者のないと言われた上総屋音次郎が、死んで一文もないなんぞ、皮肉すぎますよ」

「搜しようが悪かつたんだらう」

「そんなはずはありません。床下から天井裏まで捜したんだそうで」

「それとも主人が死ぬと一緒に、誰か持出した奴があるのかな」

「熊鷹の眼が二三十見張っている中から、巾着きんちやく一つ持ち出せるものじゃありません。まして千両箱を五十も百も」

「よし、判った。八五郎に揚足あげあしを取られるようじゃ世話アねエ」

平次は苦笑いをしました。

「そこで一つ、親分にお願ひがあるんだが」

「なんだい」

「上総屋の番頭さんに逢つて下さいよ」

「？」

「亡くなった主人は、どこかに金を隠してあるに違えちげねえが、何人かかっても見付かりそうもない。金が出なかつた日にや、後の恰好かっこうがつかないそうです」

「で？」

「番頭さん、構わないから入つて来てくれ。お前さんから、親分に話してみるがいい」

ガラツ八は入口の方を振り向いて、大きな声を出しました。

「それじゃ、御免下さい」

静かに格子を開けて入ったのは、二十三四のまだ若い男でした。地味な風をしておりませんが、ちよつと良い男でどこか笑顔に人をそらさないところがあります。

「お前さんは？」

狭い家、初夏の風が吹き抜くように開けっ放してあるので、平次は坐ったままで、客の物腰がよく見えます。

「上総屋の番頭で、仙之助と申します。八五郎親分にお願ひして、主人の隠した金を見付けて頂こうかと思いましたが、八五郎親分は、銭形の親分さんにお願ひした方がいいとおっしゃるので、先刻から門かどぐち口を拝借して、お待ちしておりました」

若い番頭はそれだけの事を言ううちにも、すっかり恐れ入って、立て続けにお辞儀をしております。

「宝捜しは困るよ、番頭さん」

「へエ——」

「上総屋の案内を知った者が、幾日かかっても解らないというのに俺が行ったところで解るわけではない。そいつは岡つ引より易えきしや者へ行く方が早いぜ」

平次は宝捜しにまでコキ使われる馬鹿馬鹿しさが我慢がならなかったのです。

「でも、それじゃお嬢さんが可哀想でございます」

「お嬢さんが？」

「上総屋に金があればこそ、親類も知合いもあの通り肩を入れてくれますが、何にもないと判ったら、どうなることとございましょう。それにせつかく纏まりかけた縁談も、お気の毒なことに駄目になります」

「縁談？」

「お嬢さんのお染さんは、たった一人娘で、この秋には御武家方から御養子が入らっしゃるはずでございました」

仙之助の心配するのは尤もでした。主人が死んだ上、金が一文もないと判っては、武家の次男坊がわざわざ町人へ養子に来るはずありません。

「そいつは気の毒だが、どうも俺は宝捜しに乗出すわけには行かぬエ。いずれ分別人の上総屋のことだから、どこか容易に見付からないとこへ隠してあるんだろう。お互に抜け駆けの功名をする気にならずに、多勢で手を分けて探してみるがいい。五十も百もある千両箱を、懐へも袂へも隠せるわけはないから」

平次はそれつきり縁側へ出てしまいました。十万両の宝捜しよりも、朝顔の苗の方が大事だったのです。

二

「親分、だから言わねエこつちやねエ」

ガラツ八の八五郎が飛込んで来たのはその翌^{あく}朝。

「なんだって腹を立てているんだ。俺は文句なんか言われる覚えはないぜ、八」

平次は機嫌の好い寝起きの顔を狭い庭から持つて来ました。

「親分が御輿^{みこし}をあげないから、とうとう人死^{ひとしに}がありましたぜ」

「誰が死んだんだ」

「上総屋の甥^{おい}の重三郎ですよ。その死にようが大変なんで、行ってみて下さいよ、親分」

「よしッ、それじゃ出かけよう」

「まごまごしていると、市ヶ谷の富蔵親分が、誰^{たれかれ}彼の^{かれ}見境もなく縛ってしまいますよ」

「縛りたきや縛らせておくがいい」

そう言いながらも、事件が思いの外の重大性を持っていそうなのが平次の岡っ引本能を鼓舞こぶします。

飯田橋中坂下の大地主、上総屋に駆け付けた時は、家の中はまだゴツタ返しておりまして。

「お、銭形の」

一番早く見付けたのは、山の手で顔を売った御用聞、市ヶ谷の富蔵です。中年者の強したたかな顔には、さり気ないうちに敵意が燃えて、出来ることなら平次を一步も中へは入れたくない様子でした。

「市ヶ谷の親分、何か大変なことがあったんだってね」

「まあ、見てくれ、白しろねずみ鼠ねずみが柵ます落おとしに掛かつたようなものさ、死んだ上総屋の主人も、

とんだ人が悪いよ」

富蔵はそれでも案内顔に先に立つてくれます。

家の中をザツと見て、平次も胸を悪くしました。よくもこう滅茶滅茶に叩きこわしたと思うほど何もかも原形を留めません。床も天井も引き剥ひがしたまま、壁は落され、炉ろの灰は掻き廻され、戸棚も箆たんす筒も引つくり返して、千両箱の行方を捜した様子です。

ジロジロ四方あたりから見ている不安な眼差しの中を、富蔵は裏の物置の蔭に案内しました。そこには稲荷いなりの祠ほこらがあつて、その祠の後ろ——崖がけへ横に掘ったお狐の穴とも思えるのが、入口を組み上げた材木と巨大な石が崩れ落ちて、若い男を一人、虫のように押し潰つぶしているではありませんか。

出入りの者や、番頭手代達の手で、崩れた材木と石を一応取片付け、死体を引出してむしろ箆しほをかけたばかりのところ。

「これだ」

富蔵はそれを指して、酸すっぱい顔をするのです。

「この穴の中に金があると思つたんだね」

平次は真つ暗な穴を覗きました。

「狐の穴の中に千両箱を隠すのは思いつきさ。盗とる気に入った者が材木と石に押し潰つぶされたんだからこいつは天罰とでも思わなきやなるまい」

と富蔵。

「天罰にしちや手厳しいね」

「天罰でなきや、下手人はお狐か、死んだ先代の主人だ。銭形の親分が夫婦づれで来て、

こいつは縛れっこはねエ」

市ヶ谷の富蔵は少し皮肉な調子で、ニヤリと平次を見ます。

「なるほど、金を穴の中に隠して、入口へ危ない仕掛けをしておくのは、ありそうな事だが、——本当に中に金があるのかな」

平次は崩れた入口から、中腰になって穴の中へ入って行くのです。

「親分、危ないじゃありませんか」

ガラツ八は後ろからその袂を押えました。

「狐が嘯み付くとも思うのかい」

「狐は心配ないが、また崩れたらどうするんです」

「いちど崩れたんだもの、もう大丈夫さ。仕掛けは種切れだよ。そんな心配するより蠟ろうそを持って来てくれ。提ちようちん灯には及ばねエよ、中は狭い上に浅い様子だ」

平次はそんな事を言いながら、恐ろしく念入りに穴の入口を調べ始めました。

「へエ、親分蠟燭」

裸蠟燭を二本、灯をつけたまま持って来たのを受取って、平次はもういちど穴の中へ潜りましたが、やがて尻の方から出て来たのを見ると、失望の色が蔽おほうべくもありません。

「どうした、錢形の」

富蔵もキナ臭い鼻を持出しました。

「千両箱はおろか、ろくなお賽錢さいせんもないよ」

平次は泥だらけになった着物を払いながら、苦笑いしております。

「それじゃ、親分」

ガラツ八もなにかつままれたような心持でした。

「中は恐ろしく狭い上に、苔こけで一パイさ、千両箱なんか隠せる場所じゃねエ。それに、穴あ守なもりのお狐もそう言っていたよ。生れてまだ千両箱と鼠の天プラにはお目に掛ったことはないってね」

「親分？」

「解ったよ八。お前は、金を隠していない場所に、危ない仕掛けをしたのがおかしいって言うつもりだろう。その通りさ、この穴の中に千両箱がいっそく束もあつた日にや、物事が素直に運びすぎるよ」

平次はそんな無駄を言いながらも、忙しくその辺を捜し廻っております。

三

「市ヶ谷の兄哥あにい、この仕掛けは古いものじゃないぜ」

平次は落散る材木や、それを釣った縄なわきれ切等を丁寧なに調べました。

「どうせ新しいものに決っているだろうよ。東照権現様江戸御入府前からあるわけはねエ」
富蔵は一向いっ氣の乗らない様子です。

「それにしても新しすぎるよ。——死んだ主人の音次郎は三月前から寝ていたっていうが、この仕掛けを拵こぎえたのは、どんなに間違つても、十日より前じゃねエ」

「？」

「この仕掛けをしてから雨が一度も降らなかつた。その証拠は縄が真新しくつて、石も木も上から流れて来る泥を受けた様子はねエ」

平次の言葉の意味の恐ろしさが解ると、皆んな黙り込んでしまいました。三月前から寝ていた主人の作ったものでないとすると、この仕掛けの意味は深刻なものになります。

「それに、重三郎が穴へ入るつもりで、中腰になって、狭い入口を半分ほど入ったとき、網もうじやか何か引いて、仕掛けの石と材木を落したんだ。こんな器用なことは、狐や亡者もうじやに出

来ることじゃねエ」

銭形平次の論告は、何を憚はばかるところもなく、誰の抗弁も許さずに、遠慮なく皆んなの耳に入つて行くのです。

「で、どうしようというのだ、銭形の」

富蔵は少し我がを折りました。

「一と通り皆んなに逢つてみよう。千両箱が出るか、下手人が出るか、それからだ」

平次は自分へ言い聴かせるように、こう言つたきり、黙つて眼でガラツ八に指図をします。

「ここへ呼んで来ましょうか」

「うん、死体の前がよからう。一人ずつ呼んで来るがいい」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行つたと思うと、第一番にまず大番頭の和七を、襟えり髪がみを掴つかまないばかりに引つ立てて来ました。

「親分さん方、御苦労様でございます」

物馴れた五十前後の男、弾力も圭角けいかくも失つてしまった、忍従そのもののような典型的

な番頭です。

「番頭さんかい、——お前さんが店の支配をしているなら、主人が金をどこへ隠しておくか見当くらは付いているだろう」

平次はいきなり突つ込んで行きました。

「へエー、それが、その、私の口からは申上げにくいことですが、一風変つた御主人で、その日の勘定から、帳尻は私にさせますが、纏まとまった現金は、どこへやりますことやら、ツイぞ見たこともございません」

そんな事があり得るだろうか、と言つたような平次の顔を見ながら和七は一生懸命弁解に努めるのです。

「それで商売の方はうまく行っているんだね」

「へエ、それはもう」

「お前さんはこの店に幾年居るんだ」

「足掛け三年になりますか——」

「それで支配人というわけか、前の大番頭はどうしたんだ」

「不都合なことがあつて、身を退ひいたそうでございます。もっともその方は二年くらいし

か居なかつたようで」

「この家は番頭が長く勤まらないのだね」

平次は妙なところに気が付きました。

「そんな事もございませぬ。現に仙之助などは、七年も勤めているそうで——」

「その番頭だけ居るんだね」

「……………」

和七は氣拙きまづそうに黙り込んでしまいます。

「ところで、上総屋の身上はどれほどあるだろう。支配人のお前に見当が付かないことはあるまいが——」

「それが、その、——地所と貸金では差引勘定借りの方が多くなります。世間の評判通り、何万両という金を隠してあれば別ですが」

世間の噂うわさでは——上総屋の土蔵の中は小判が一パイ。それを泥棒に狙わせないために、入口の方へは何千貫とも知れぬ青銭と鑿びたせん銭とを入れておくとか、土蔵三戸前の腰張りの内側は、ことごとく金蔵になっていて、何万両とも知れぬ大判小判が入っていると云われておりますが、三つの土蔵は主人が死ぬと同時に、たった一人残された娘お染の前もはば

からず、親類と雇人が集まって、滅茶滅茶にかき廻され、床も天井も腰張りも、無残に引き剥がされてしまいました。大判小判はおろか、鏝錢一枚も出ては来なかつたのです。

四

次に引つ張り出されたのは、死んだ主人音次郎の弟で、居候並に扱われている音松という中老人でした。若い時はいくらか様子がよかつたらしく、放埒ほうちやうに身を持崩した末五十過ぎてから兄の家に転げ込み、障子も張れば便所の掃除もするといった、恐ろしく気の軽い男で、鼻唄交りにその日その日を暮している札付の放浪者ゴヘミアンでした。

「兄は何万という金を溜め込んでいるに違いありませんよ。公儀御用を承つて日光山の御修復まで引受けたこともある男ですもの」

「それをどこに隠してあるんだ」

平次は少し焦れ込みました。このニヒリストは、話し相手を焦らすのを、話術の玄妙と心得ている質たちの男です。

「隠した場所が判つていれば、今頃まで放つておくものですか。あの支配人の和七が一番

先に取込みますよ。もつとも私だつて負けちゃいけませんかね、へっへっ」

こういつた調子の男は、平次の忍耐力でも長くは付き合いきれませぬ。

三番目に姪のお今、——姪といつても恐ろしく遠い姪で、親類書に載る顔ではありません。
ん。

「お前の知つてゐるだけの事を話してくれ」

平次はこの賢くないらしい娘からは、あまり大したことは期待しませんでした。二十三にもなるでしょう。丸ぼちやの可愛らしい娘ですが、笑つても、物を言つても、無智な愛あ嬌いぎょうがこぼれそうで、これも付き合いきれないところがあります。

金があるかないかはもとより知らず、この家に来てから五年になるが「ろくなお小遣も貰えんわなかつた」と少し怨えんずる色があります。

番頭の仙之助は二三日前に平次が逢つたばかり、ひどく興奮しておりますが、言うことはハキハキして、何を措おいても死んだ主人の隠した何万両の大金を、一番先に手に入れることに骨を折つてゐる様子です。

「親分さん、お願いでございます。金が出て来なかつた日には、この家は立つて行きませ
ん」

半ば絶望しながらも、平次の叡智えいちに縋すがり付こうとしているのが、痛々しいほどよく解ります。

「お前は、お染さんと何か約束でもあるのかい」

平次は思いも寄らぬことをズバリと言いました。

「とんでもない、親分」

愕然がくぜんとして挙げた仙之助の顔は、まだ去りもやらず、その場の様子を見ているお今の顔とハタと逢つたのです。

「たいそう肩を入れるようだが」

「お嬢様には、お武家方から養子が来ることに話が纏まとまっております。が、金の隠した場所が解らないと、その話の進めようがなくなります」

「それはお染も承知か」

「へエ——」

仙之助の一生懸命さには、何か仔細しじさいがありそうですが、それは平次の慧眼けいがんにも容易に解りません。

最後に呼出されたのは娘のお染でした。

「お前はお染さんかい」

物置の前、重三郎の死骸の側へ呼出すにしては、これはあまりに痛々しい姿でした。せいぜい十八九にしか見えない若々しさも、生得の麗質が年齢を刻む由もないほど玲瓏れいろうとしていたためでしょう。「美しい」といったような、通り一ぺんの言葉で、これは形容される娘ではありません。人によつてはこの病的にさえ見えるなやかさを、醜いとするかもしれません、人間の血肉を盛った存在で、こんな不思議な魅力を持ったのを、平次はまだ見たこともないような気がするのです。

「お嬢さん、私の訊くことに、包み隠さず応えて下さいよ」

「ハイ」

お染は素直にうなずきました。そう言わなくなつてこの娘に嘘も掛引もあろうとは、平次も最初から思つてもみなかったのです。

「亡くなつた父さんが、どこへ金を隠したか、お前さんなら見当くらは付くはずだと思
うが——」

「私は、あの、そんなお金は、出て来ない方がよいと思います」

お染は少し涙ぐんでおりました。奉公人や親類方が、隠された金を探し廻つて、氣違い

じみた打ちこわしを始めるのを、お染はどんなに苦々しい心持で見っていたことでしょう。

「すると、お気の毒だが上総屋の身しんしょう上は持たないそうですよ」

「それでも構いません」

「お嬢さんは、お武家方から来るといふ、養子が嫌なのですね」

「……………」

お染は黙ってしまいました。

「死んだ重三郎は、店の者の受けはどうでした」

「さア、私には」

お染は内気らしく尻ごみをします。

「お嬢さんは仙之助をどう思います」

黙って顔を染めた娘の顔から平次は何もかも見抜いた様子です。

五

「さア解らねエ——親分、これはいつたどこに眼鼻があるんでしょう」

ガラツ八は四方構あたりわず張り上げました。

「何万両かの金はどこかに隠されているのさ。それを皆んなで、一生懸命捜し廻っているんだ。命がけの宝探しだよ」

「へエ——」

「殺された重三郎の身体を見よう」

平次はガラツ八と富蔵うながを促して重三郎の死骸むしろうから筵むしろを剥ぎました。

「おや？」

ガラツ八はギョツとした様子で重三郎の傷を眺めております。

「気が付いたか、八」

「こいつは、上から落ちた材木や石に打たれて死んだんじゃないやありませんね」

「その通りさ。材木や石に打たれて死んだように見せかけているが、重三郎の頭を打ったのは、極ごくく小さい石だ。——人間を丸ごと押し潰すような材木や石じゃないよ。第一そんな重いものを穴の上に持上げるのは、一人や二人の力では出来ない。それに、あの仕掛けはツイ五日か三日前に拵こぎえたものだ」

平次の言葉は至つて印象的ですが、恐ろしい疑問を次から次へと投げかけて行きます。

「？」

「重三郎は宝捜しのつもりで穴へ入って行った。——穴は狭くて身体を返すわけには行かないから、出る時は尻から出て来た。——大骨折りで首を出した時、誰か穴の外に待ち構えていて、手頃の石で頭を打ち割ったのさ。上から落ちた石が、あんなに都合よく頭の上へ来るものか」

「すると？」

「企みは思ったより深い。重三郎の懐中や袖の中をもう少し念入りに捜してみるがいい」
平次とガラツ八は気の進まないらしい富蔵に手伝わせて、死骸の身体を念入りに調べて行ききました。

「こんなものが袂たもとの中ちゆうにありましたよ、親分」

「なんだ、大福帳の端っこを鋏はさみで切ったのじゃないか、——いなりのうしろ、あなのなか——と書いてあるのか、これは誰の字だ」

平次はまだその辺にうろうろしている大番頭の和七を呼びました。

「……………」

和七の表情は急に硬こわばります。

「この右下がりの筆癖ふでぐせは、お前に解らないはずはあるまい」

「亡くなった主人の字にも似ておりますが——」

「まだ外にこんな字を書く者があるだろう」

「へエ——」

「誰だ」

平次の問いは仮借かしゃくしませんでした。

「仙之助が主人を真似て、右の肩下がりの字を書きます」

和七はそう言うのが精いっぱいでした。

「親分」

ガラツ八と富蔵は顔を見合せました。合図一つで、飛出して仙之助を縛り兼ねまじき気色です。平次はしかし、それを眼で押えて、それ以上追及しそうもありません。

その日の調べは、それでおわりました。宝探しの深刻な競争は、まだ続いている様子ですが、平次はそんなものには眼もくれず、和七にいろいろの帳面を出させて解らないながらも一応眼を通し、それから大きな取引先を二三軒訪ねて、上総屋の財政状態を、出来るだけ調べました。

それから三日目。

「親分、大変ですぜ」

上総屋を見張らせていたガラツ八が、少し取りのぼせた形で飛び込んで来ました。

「何をあわてているんだ、八」

「音松がゆうべから帰りませんよ」

「音松？」

「死んだ主人の弟で、あの野のだいこ幫間みたいな野郎ですよ」

「どこへ行ったんだ」

「町内の湯へ行くつて出たつきりですつて」

「それは変だね、行ってみようか」

平次とガラツ八は時を移さず飛びました。飯田町の上総屋へ行ってみると、音松の行方ゆくえ不明などは忘れたように、奉公人も親類も、相変らず宝捜しに夢中です。

「音松さんが、昨夜から帰らないそうじゃないか」

「へエー、そんな事は滅多にありませんが、また昔の病いが出たのかも解りませんよ」

番頭の和七は心得顔でした。放埒ほうらつもの者で鳴らした音松の悪名は、和七もことごとく承知

だったのです。

「どんな様子で出かけたんだ」

「まだ宵のうちでした、手拭をブラ下げて」

「下駄はを履はいてかい」

「草履ぞうりを履はいて、何か変な道具を懐へ入れて行きましたよ」

小僧の直吉が口を挟みました。

「鋏くわや鎌かまじゃあるまいな」

と平次。

「そんな大きなものじゃありません」

「道具箱を見てくれ、何かなくなつたものがないか」

「……………」

和七は黙つて物置へ行きましたが、しばらく経つてから、

「大鑿おおのみが一挺見えませんよ、親分」

「よしよし、そんな事だろうと思つたよ」

平次はいきなり帳場へ行くと、この間見たばかりの大福帳仕入帳などをパラパラ繰つて

行きました。

「これだ、八」

指さしたのは、鋏で紙を切取った跡が二ヶ所。

「そいつは何です、親分」

八五郎はその意味が呑込めません。

「この近くに上総屋の寮か、隠居所がないか訊いてくれ」

「へエ」

八五郎は飛んで行きましたが、奉公人たち二三人に逢って引返すと、

「寮も隠居所もないが、神楽坂裏かぐろざかに久しく空いている貸家が一軒あるそうですよ」

こんな事を聴込んで来ました。

「よし、そこへ行こう。小僧を一人借りて来い」

小僧の直吉を先に立てて、平次と八五郎はさっそく神楽坂に向いました。

「ここですよ、親分」

直吉が示したのは町裏の藪やぶの中に置き忘れたような空家が一軒。裏へ廻ると、雨戸は一枚外したまま。そこからいきなり飛込んだ八五郎は、

「あッ、大変ッ」

あたり四方構わず声を張り上げます。

「音松が殺されているんだらう。押入か床下へ首を突っ込んで」

平次は静かに外から応じました。

「どうしてそれを？」

「懐の中には、古帳面から切抜いた紙に、右肩下がりの字で、——神楽坂の貸家——とか何とか書いたのが入っているはずさ」

平次の言葉は恐ろしいほどの中しました。

音松は空家の奥の六畳の押入に首を突っ込み、床板を剥はがしたまま背中からあいくち首を突き立てられてこと切れていたのです。

「親分、あの押入の床下に、千両箱がありやしませんか」

「馬鹿ッ、誰がこんなところに千両箱なんか持込むものか。あればせいぜいねずみくそ鼠の糞くらいなものだ。それよりは、音松の身体を捜せ」

「帳面の紙片なんかありやしませんよ」

「くせもの曲者はこんどは持つて行つたんだ。よしよし証拠は一つでたくさんだ。ところで小僧

さん」

「へエ——」

不意に平次に声をかけられて案内の小僧は飛上がるほど驚きました。

「驚くことはない、——これだけ教えてくれ。ゆうべ音松が出た後か先に、飯田町の家を出たのは誰と誰だ」

「皆んな出ましたよ」

直吉の返事は想像を飛び離れます。

「皆んなというと？」

「番頭さんは夕方から日本橋の御親類へ、仙之助さんは音松さんの出たすぐ後で、やはり町内の湯へ行つたようです」

「お嬢さんは？」

「お嬢さんはどこへも出ません」

「お今は？」

「お今さんも家に居りました。ひどく頭痛がするって、御飯も食わずに、自分の部屋へ入って休んだようです」

「それから？」

「それつきりですよ」

「親分、縛ってしまいましたよか」

ガラツ八は我慢のならぬ様子でした。

「誰を？」

「仙之助の野郎をですよ」

「もう少し待ちな——こんどは仙之助が殺される番だ」

「へエ——」

ガラツ八には何が何やら解りません。平次の言葉はあまりにも奇つ怪だったので。

「それより、ゆうべの和七と仙之助の足取りを調べて来い。時刻を訊き漏らしちゃならねえよ」

「親分は？」

「俺は上総屋へ行く。音松を刺したヒ首が、どこかに隠してあるはずだ。捨てるにしちや下手人は捌口りこうすぎる。それから、和七と仙之助の外に、昨夜そつと脱け出した奴があるかも解らない」

平次は直吉と一緒に上総屋へ引返して行きます。

六

平次が上総屋へ帰って来ると、こつちにも大変な騒ぎがありました。

「親分さん、大変ですよ。お染さんが」

お今は持前の愛嬌をどこかへ置き忘れてもしたように、アタフタと平次を迎えます。

「どうしたんだ」

「殺されかけたんです」

「えッ」

「朝のおみおつけに何か入っていました。でも、お染さんは食の細い人だから、いくらも喰べなかつたんで助かりました」

平次はその話を半分聴いて、お染の部屋へ飛込みました。町内の本道（内科医）が、玉子の白身しろみや油を吞ませて大方は吐かせたそうで、今は疲労のために、うつらうつらしております。

「お、銭形の親分」

本道は坊主頭をふり向けました。

「何だろう、先生」

「石見銀山いわみぎんざんかな。——お嬢さんの味噌汁にだけ入っていたところをみると、企んだ仕事

だよ、親分」

「誰がその味噌汁を拵こぎえたんだ」

と平次。

「お勝手に、皆んなのと一緒にかまお鎌が拵えますよ。もっともお染さんは気分が悪いから、欲しくないって言うのを、仙之助さんはそりや親切だから、自分でお膳まで運んで食べさせましたが——」

お今の説明には、何かしら含んだものがあります。

「仙之助はどこに居るんだ」

「市ヶ谷の親分が縛って行きました」

大番頭の和七はおろおろした顔を出しました。

「たったそれだけの事か」

「仙之助の行李こつりの中に、石見銀山の使い残りあいくちと、少し血の付いたヒ首あいくちがありました。へエ、今聴くと音松さんが、神楽坂の空家で殺されたそうで、本当に怖ろしいことでございます」

和七は心なしか、ブルブル顫ふるえている様子です。

「市ヶ谷の親分が仙之助を縛って行くのも無理はないが、そいつは少し早まったかもしれないよ。使い残りの毒や、血染めのヒ首などは行李の中へ入れてしまっておくものじゃねエ」

「左様でございます、親分」

この無能な大番頭からは、平次は何の反応も求められません。

この騒ぎの中へ、八五郎が帰って来ました。

「親分、二軒とも違いなく行っていますよ」

「で？」

「時刻も合っているようです。——もつとも、神楽坂へ廻って、待つてなんかいずに音松を刺して、すぐ帰って来るような手順に行けば別だが——」

和七と仙之助は一応不在証明アリバイを持つていますが、それが完全とは言いきれません。

「よしよし、俺にはだんだん解つて来るよ。そこで番頭さん、今晚奉公人も親類の方も、皆んな集まって貰つて下さい。あつしから話したいことがあるから」

「へエ——」

「八は番所へ行つて、仙之助を貰つて来てくれ、たった一と晩のことだから、なんとか話がつくだらう。平次が見張つていて、明日は間違ひなくお返し致しますつて言やい」

「へエー」

八五郎を出してやると、平次はもういちど念入りに上総屋の外廻りを調べました。

七

その晩、上総屋の奥に集まったのは、家族、奉公人、近い親類などぎつと十七八人。平次はその緊張した顔を見渡して、静かに語り出しました。

八畳と六畳を打ち抜いて、燭しよくだい台が四つ、平次の前にはお染とお今。その横には和七と仙之助。親類方はその後ろへ、奉公人はその横に並びました。

「さて、皆の衆。こんな事を言うと言驚くかも知れないが、言わなきやいつまでも皆んなの

迷いが晴れまい。実は——」

平次は口を切つて、一座を見渡しました。

「……………」

緊張しきつた顔と顔、——たぶん平次の口から、二人まで人を殺した恐ろしい下手人げしゆにんの名を聞けるのかも知れないと思つてゐる様子です。

「驚いてはいけない。飯田町の上総屋、——神田から番町へかけても、並ぶ者がないと言われた大分限の上総屋には、氣の毒なことに一文の金もなかつたのだ」

「……………」

水をブツ掛けたような恐怖と驚愕、一座は顔を見合せました。

「少なくとも三万両、五万両、どうかしたら十万両もあるだろうと思わせたのは、上総屋の主人の腕だ。まことは過る年すくの日光の御修復で下請負したうけおいの手違いから、工事のやり直しをしたために、十万両からの出費で、上総屋は一文なしになつてしまつた」

「……………」

「商人は信用を落しては一日も立ち行かない。上総屋はその秘密が知れそうになると番頭を代え、大金をどこかに隠してあると見せかけ、世間にもそう思わせて、苦しい店を今日

で張つて来たのだ。死んだ後でいくら探したところで、十両と纏まとまった金が出て来るわけではない。皆んなも、もう床を剥はいだり、壁を崩したりするような浅ましい事は止よした方がいい。——この平次が、三日がかりで帳面を調べた上、取引先を一軒一軒訊いて廻つたんだから、これは間違いはない。お気の毒だが、上総屋に残るのは、少なからぬ借金だけだ」
 恐ろしい失望が、十七八人の顔を暗くしましたが、その間にたった二人、厄介な因縁いんねんから解放されて、ホツとした顔を見合せた者があります。

「お嬢様」

仙之助は和七を隔へだてて、お染に声を掛けました。

「私は、私は——」

お染はさすがに「私は嬉しい」とは言い兼ねましたが、仙之助を顧みたその明るい表情には、幸福感が溢あふれております。

「御安心なさいまし、お嬢様。お店は私がいいようにいたします。一生懸命になったなら、昔ほどではなくとも、お嬢様をお困らせするようなことはないでしょう」

上総屋が一文なしと決れば、武家方の養子は破談になるのに決っております。今までお染のために宝探しに熱をあげていた仙之助は宝がないと決れば、さすがにこみ上げて来る

嬉しさをどうすることも出来なかったのでしょう。

「仙之助はお染と一緒にあって、上総屋の身上を盛り返して行くがいい。——誰もそれに不服はあるまい」

平次のそう言う声も嬉しそうでした。が、事件がまだ片付いたわけではありません。二人まで大の男を殺した下手人は解つていなかったのです。

八

その晩、通り魔のような影が一つ、お染の部屋へスルリと滑り込みました。

有明の行灯あんどんを吹消して、逆手さかてに持ったヒ首あいくちが、お染の寝首へ——

「御用だツ」

曲者のヒ首を持った手はむざと掴つかまれました。逆に捻ひねつて膝の下に敷くと、

「八、灯あかりだ」

平次の声です。

「おい」

手燭を持つて、六法を踏むように飛んで来たガラツ八。平次の膝の下の曲者の顔を見て、さすがに仰天しました。

「こいつが曲者ですかい、親分」

「見るがいい。——持前の愛嬌などはどこにもない、夜叉やしやのような女じやないか——あツ舌を噛み切りやがった」

平次の膝の下で、殺人鬼のお今は、舌を噛み切ったのです。怨みと憤りに燃える顔は歪ゆがんで、キリキリと結んだ唇からは、糸を引いて血が流れます。

*

事件が済んでしまつてから、ガラツ八の燃える好奇心に対して、平次はこう言います。

「重三郎は主人の甥で、音松は主人の弟だ。この二人とお染を殺せば、万という金が遠縁ながら姪の自分へ入つて来るとお今は考えたのさ。重三郎を殺したのが、力の要る仕事のように思わせて、その実非力な仕業と解つて、俺は下手人は女じやあるまいかと思つたよ」

「へエ——」

「帳面の紙を切つて、重三郎と音松をおびき出したのは、一応仙之助の仕業のように見えたが、右肩下がりの字なんか誰でも真似られるよ。——それから、音松を殺した晩は、頭痛がすると言つて、早くから自分の部屋に籠り、そつと窓から脱け出している」

「なるる——」

「石見銀山と血染めの匕首を、仙之助の行李こくりに隠したのは、賢いようでも女の猿智恵さ。あんな事をしたので、いよいよ俺は仙之助が潔白だと思つたよ。お今は自分の思う通りにならない仙之助が憎らしくてならなかつたんだ」

「……………」

「上総屋には十両の金もないとわかると、こんどは仙之助と一緒になりそうなお染が憎くなつた。お今は最初この家に乗つ取つて仙之助と一緒になるつもりだったかも知れない——ともかく、昨夜はつきりお染と仙之助の気持が解つて、急にお染を殺す気になつたのさ。あの愛嬌者のお今の顔が急に怖くなつてお染を睨んでいるのが容易でなかつたので、俺はお染の代りにあの部屋で待つている気になつたのさ」

「へエー、驚いたことだね、親分」

「もつとも、お今のようなのばかりじゃない。女の中には、何万両の金がないと知れて、

かえって喜ぶお染のようなものもあるよ。仙之助も仕合せ者さ」

「へッ」

「妬^やくな妬くな、そのうちにお前にも、良いのを見付けてやるよ」

平次はそう言って面白そうに笑うのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十一）懐ろ鏡」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物全集第二十巻 狐の嫁入」同光社磯部書房

1953（昭和28）年11月15日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1940（昭和15）年6月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2019年8月30日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

十万両の行方

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>